

藤沢市立滝の沢小学校

研究テーマ：すべての児童が尊重される授業づくり～課題と授業展開の検証を通して～

1、実践の目的

本校では、「すべての児童が尊重される授業づくり」「主体的・対話的で深い学びの実現に向けて」をテーマに、授業改善に取り組むこととした。学力・学習状況調査では、国語正解率が全国平均に比べて4%低いことや、日々の学習結果などから、国語を中心に児童の現状を踏まえ、小学校で確実につけるべき力は何なのか、そのためにはどのような授業を行っていけば良いのかを探っていく。有識者の講義を受けたり、教師自身が学ぶ姿勢を大切にしたりしながら、児童の学びに向かう力を育てる授業づくりを検証していきたい。

2、実践の内容

(1) 山梨大学 茅野政徳先生 講演会

2022年8月24日、山梨大学准教授茅野政徳先生を招聘し、本校の研究テーマに沿った講演をお願いした。茅野先生のお話は大変勉強になり、2学期を迎える直前であった教員の心に一石を投じてくださった。講演の主な内容としては、

- ・国語科では日常や次単元に転化する「開かれた学び」をすることが求められること
- ・過去の学びが生きることに気づくことで深い学びへとつながっていくこと
- ・言葉の力をはぐくむことが、一人一人を確実に伸ばす授業へとつながっていくこと
- ・「対話的な学び」は自己の考えを広げ、深めるもので、「得をするもの」であること
- ・「文章を読み、感じたことや考えたことに

は一人一人違いがあることに気付くこと」という国語科の内容が学校に来る意味として大きなものであること

- ・自分の指導の癖を知ることが、授業改善の視点となること
- ・国語は他者評価であること
- ・子どもの具体的な学ぶ姿を想定して、即時的評価を大切にすること
- ・校内で教員同士の評価観をすりあわせる機会をもつこと

などなど、たくさんのことを教えていただいた。特に、本校の課題であった「一人一人を確実に伸ばす授業」について、「言葉の力をはぐくむこと」の重要性を説いてくださり、研究の見通しを持つことができた。

(2) 部会ごとの研究授業の実践

低学年、中学年、高学年、特別支援学級の四つの部会ごとに、公開研究授業を行うこととした。授業者が一人で授業づくりに取り組むのではなく、部会ごとに話し合って授業を作り上げていく。授業者は他のクラスで事前授業をすることで、授業をブラッシュアップさせることができた。研究会の日は、全学年午前授業として、教員も学びやすい環境を整えた。

①10月24日 高学年部会（6年2組）
作品の世界をとらえ、自分の考えを書こう
「やまなし」

教師は

★授業者は児童を価値づけて（ほめて）いたか

- ★主体的な学びの姿がみられたか
 - ★対話的な学びの姿が見られたか
 - ★深い学びに向かう姿は見られたか
- という4つの視点に基づいて参観し、子どもの学ぶの姿に着目した事後研究会を行った。



②1月16日 中学年部会（3年1組）
「漢字の意味」

振り返りの時間を十分に確保することと、小単元を大切にすることという意識で行った。小単元はつい軽視してしまいがちだが、「言葉の力をはぐくむ」ためには小単元をおろそかにしてはいけないという意識の再確認ができた。

③1月27日 特別支援級部会（5組）
「5組お話とんとん」

子どもが自分で読んでみたい本を決め、相手に伝わるように意識して、読み聞かせの練習をした。他者意識を持たせることで、言葉のもつ意味を大切にすることが見られた。

④2月20日 低学年部会（1年3組）
よんで かんじた こと はなそう
「ずうっと、ずっと、だいすきだよ」

教師がおのの注目する児童を決めて、反応や思考の深まりを丁寧に見るといった研究の形式にも慣れてきた。研究会では、本校担当指導主事にご指導いただいた。1年生の児童でも、話してみたいな、と思うような「本質的な問い」を単元を通して入れていくことで、子どもたちの学びが深まっていく、という助言をいただいた。

（3）全校で取り組む「金トレ」

週一回金曜日の朝のモジュールの時間は全校で語彙力を高める「金トレ」を行うこととした。「教室で使えるカクトレ（東洋館出版社）」を使用し、学校全体で系統立てて語彙力や書く力の向上を目指した。書くことに苦手意識を持つ児童は多い。毎週の積み重ねと、振り返りにおける自己評価の習慣化で、達成感や自己肯定感の高まりを狙った。

3、実践の成果

全教員が、「言葉の力をはぐくみ、確実に一人一人を伸ばすためにはどんな授業づくりをするべきか」、という同じ目標を持ち、日々取り組んできたことが、子どもたちの学習の定着につながった。また、主体的に子どもたちが学習に取り組み、お互いに関わり合いながら活動する姿もあたりまえの光景になりつつある。そして、外部講師を招聘した講演会を開催したり、多くの参考書籍を購入できたりしたことなどで、教員自らが学び続ける必要性を再確認することができた。

4、今後の展開

主体的・対話的で深い学びを実現させるために、毎日の授業が児童にとっても教師にとっても、心から楽しいものでありたい。

授業研究を今後も継続することで、子どもたちに達成感や自己肯定感を持たせることができ、学びに向かう意欲のさらなる高まりが見られるに違いない。その姿を見ることで、教員も達成感が得られる。

研究は始まったばかりである。今後も取り組みを継続し、子どもたちの「言葉の力」をしっかりはぐくみ、確かな学力定着を図っていきたい。